

広島大教育 岩重博文

目的 近年、大学の郊外キャンパスへの移転、あるいは郊外での開設が多く見受けられる。大学施設本体は開設時に建設されても、大学周辺の生活施設および基盤整備はなかなか行われない現況にある。本報告では、学生自身の住生活を市街地と郊外とに大別した場合の住生活の特徴について調査・検討した。

方法 郊外を代表する広島県立大学（庄原市）および広島大学東広島キャンパス、また市街地を代表する岡山大学本部キャンパスおよび広島大学広島キャンパスを調査対象とした。調査時期は1991年夏であり、直接配布・回収した。各地区とも約150部（男女ほぼ同数）、総計600部について分析・考察した。

結果 ①郊外（山間部）の2キャンパス周辺には、以前は学生アパートはなく、すべて開設時に新築し、比較的設備の整った学生アパートばかりである。市街地に比べ選択の幅は狭い。②学生のアパートに対する要望は、部屋を広く、収納を広く、水洗トイレの完備、冷暖房の完備などであり、地域差は少ない。③通学および買い物の利便性、アルバイトの機会などについて地域による差が認められる。④郊外型キャンパスでは、通学や買い物などに対する利便性は悪い。しかし、今回の調査によると、「利便性」に対する期待度は郊外のキャンパスですでに低下している。⑤映画館やスポーツ施設など、気分転換できる施設を郊外型キャンパスの学生は強く希望している。⑥郊外のキャンパスでは、生活必需品として自動車の所有が拡大しており、学生の経済的負担と同時に交通事故の増加が心配される。